

別紙1-1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 大岩 孝

論 文 題 目

Occult synchronous liver metastasis from perihilar cholangiocarcinoma

(肝門部領域胆管癌の潜在的同時性肝転移について)

論文審査担当者


名古屋大学教授

主 査 委員

小 寺 泰 弘 

名古屋大学教授

委員

長 縄 恒 二 


名古屋大学教授

委員

西 川 博 嘉 

名古屋大学教授

指導教授

柳 野 正 人 

## 論文審査の結果の要旨

別紙 1-2

今回、肝門部胆管癌の occult liver metastasis (OLM、術後病理診断で初めて発見される潜在的肝転移) について retrospective に検討した。肝転移は非切除例 260 例の内、30 例 (11.5%) に認められ、切除例 672 例のうち 21 例 (3.1% = 21/672) に OLM が認められた。生存率の検討において、肝転移のため非切除とした群と肝転移を認めたが肝切除を伴う胆管切除を行った群では差はみられなかった。続いて、肝切除後の病理検査で OLM が見つかった切除例と、術前および術中に肝転移が見つかった症例とを比較したところ、MST で前者が 17.1 ヶ月、後者が 7.4 ヶ月であった。また、OLM 症例 21 例を補助化学療法の有無で比較したところ、化学療法ありが MST25.5 ヶ月、化学療法なしが 10.0 ヶ月で、補助化学療法を行った群で長期予後が得られる結果となった。OLM 症例において術後補助化学療法の有効性が示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 術前診断の肝転移を有する症例の切除例が研究前半に固まっていた。これについては切除による生存率の改善を認められないため、肝転移が判明した時点で手術を行わない方針へと転換したためであるが、化学療法を組み合わせることで予後の向上が期待できないか検討した。しかし、現状高い手術侵襲など考慮すると、化学療法などを先行し、著効した症例など一部の症例に限定されるべきと考えられる。
2. 同じく再発症例に関しても、癌腫によっては積極的な転移巣の切除が予後向上につながるものもあるが、肝門部胆管癌については化学療法、放射線治療などが優先されると考えられる。再発巣切除は、化学療法著効例、単発転移、良好な PS などの条件が重なる場合のみに限定されると考えられる。また、化学療法について、現在保険適応されているのが、TS-1、gemcitabine、cisplatin の 3 剤のみである。新たな治療選択として、癌免疫療法の効果については今後臨床試験などで証明していく必要があると考えられる。
3. 肝転移の術前診断の向上について、複数の画像診断を組み合わせることの有効性が示唆される。今研究では術前診断はほぼ造影 CT で行われていたが、より検出度の高い、造影 MRI や PET-CT などを併用し、術前正診率を高めることができる可能性があると考えられる。

本研究は、肝門部胆管癌の肝転移の治療を決定する上で、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士 (医学) の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した

## 試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	大岩 孝
試験担当者	主査	小寺泰弘	副査 <sub>1</sub>	長弘悦子
	副査 <sub>2</sub>	西川尚喜	指導教授	柳野正人
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 肉眼的肝転移症例の切除について</li> <li>2. 低い術前肝転移の正診率の向上について</li> <li>3. 再発症例に対する今後の展望</li> </ol> <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、腫瘍外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				